特集・都市と子ども⑨

座談会 遊び空間を考える

遠藤富三〈俱野小学校PTA会長〉
大村瑾子〈国際遊び場協会日本支部代表〉
杉原克子〈緑政局計画課主査〉
田井中分四郎〈都岡小学校長〉
西村英彦〈港南区市民課社会教育係〉
司会　中川久美子〈都市科学研究室〉

一――遊びを知らない子どもたち

司会　『都市問題研究』という雑誌がありまして、そこで樋口恵子さんが書かれていたのですが、昭和二十一年から四十八年まで続いた「サザエさん」を通読してみて、小学生のカツオちゃんとワカメちゃんの生活を追っていったんです。磯野家の中は、テレビだとか冷蔵庫だとかの電化製品が揃ってたしかに便利で豊かになっていくんだけど、それと引き換えに、子どもの世界というのは貧しく狭められていった。子どもの生活が家庭と学校という点と線だけになってしまったんじゃないか、遊びと労働（お手伝い）を失い、また、おじいさんがいて赤ちゃんもいるという、そういう人間関係も非常に貧しくなってきたんじゃないか、そういったことを書かれていたんです。私もそのとおりだという感じがしました。今日は、子どもの遊びにかかわる仕事をしていらっしゃる学校教育、公園関係、そして社会教育や市民活動の各分野の方々においでいただいたわけですが、日頃のいろいろな悩みもお聞きしながら、その中でもとくに、子どもの遊び空間を考え直してみようということで座談会を企画してみました。まず、いまの小学生気質みたいなところからお話しをお願いしたいと思います。田井中先生、学校で小学生をごらんになっていて、どうですか。

田井中　教員になって今年で三十四年目なんですが、確かに子どもは変ってきましたね。「サザエさん」の漫画のように、物が豊かになるに従って心が貧しくなり、体が弱くなっていったということは言えます。高度成長時代に学力一辺倒になったため、子どもたちを知的学習に押し込んだ結果、遊びというのが消えていったんですね。子どもたちをみてますと、生活時間が非常に忙しくて、ゆとりがない。子どももサラリーマン化している。学校に来て、今日は誰と、どのくらい遊べるのかという打ち合わせをするんですよ。誰でも十人ぐらいは友達がいるけど、いつも十人が徒党を組んで遊ぶわけじゃないんですね。十人ぐらいと個別に接渉して、そのうちの誰かとスケジュールが合えば遊ぶというんです。

杉原　そこへ行けば誰かがいるという場所がいまはないですしね。

田井中　母親から離れて徒党を組んで遊ぶ時期があると思うんですけど、そういう場があれば今の子もそうとう変るでしょうね。

司会　西村さんは社会教育を担当なさっていらっしゃいますが、今の子どもたちをどうごらんになりますか。

西村　幼児にとって遊びは生活のすべてなんですね。学童になると学習とか労働、これはお手伝いなんかですけど、そういうのが加わってくるけど、やっぱり遊びの生活ですよね。しかし、今の子ど

もたちは遊びがへたというか、遊びを知らないと思う。子どもは本来、群を作って遊ぶものなんだけど、今の子どもはその群を作るのがへたですよ。その原因として、遊びを知らないということがあげられますね。群をどうやって作っていくのかというと、遊びを知っている子がリーダーになって作っていくんですよね。また、たとえ群を作ったとしても、昔のようなタテ型の遊戯集団にはならない。遊戯集団が水平化しちゃっているから、遊びの伝承がないんです。

司会　それで伝承遊びも教えなくてはならなくなるのですね。田井中先生、今の子にない遊びってどういうものですか。

田井中　一例をあげれば基地遊びですよ。穴とか小屋で秘密の基地を作って楽しむ。家族やおとなから離れて独立性があり、組織があって役割分担もある。自分達で自治的に作りあげた役割分担や掟のある遊び集団を経て、小学校に入ってくる子はいま非常に少ない。

西村　学校で教ってきた遊びといえば、男は野球、女はドッヂボールていどです。これは都市でも農村でも同じですね。ですからテレビを見るという一人遊びがふえていますよ。それは仲間との共通の話題として『みごろたべごろ』とか『ドカベン』も必要なんでしょうけど。

田井中　テレビを見る時間を調査したデータがあるんですけど、それによると、三時間以上見るという小学生は四年生で二四%、六年生で二五%にもなっているんです。

大村　それは先生の学校ですか。

田井中　いいえ、指定都市の小学生約五千人です。

司会　それも熱中してみているんじゃなくて、宿題しながらとか、ごはん食べながら、ダラダラとみているんじゃないですか。

杉原　テレビって見だしたらおとなも消せないわね。

遠藤　私は某電機会社の系列に勤めているんですけど、そこの社長が「君たち管理職はテレビを見るな」と言うんですよ。テレビ売っている会社でそう言うんです。

田井中　子供が家に帰ってから、お母さんが帰るまでの間は、子ども向けの番組はなにもないというようにしてほしいですね。

西村　テレビを見るというのは一人遊びといっても、本当は遊んでいるのではなくて、遊んでもらっているんですよ。集団の中に入っても、積極的に加わっていけない。遊んでもらっている子が多い。常に受け身ですね。

二――子どもの自主性を伸ばそう

司会　遠藤さん、子ども会をやっていらっしゃると、もうちょっと子どもの積極的な面というのが出てくるんじゃないですか。

遠藤　ウーン、今の子どもは自主性がないですよ。これはおとながそうさせているんですね。例えば廊下に釘が出てたとするでしょ。そうすると、先生は危険のないようにと釘を打ちつけちゃう。安全にすれば怪我をする子はいなくなるけど、同時にここに釘が出ているから気をつけようという注意力が欠けてくる。すべて完璧になりすぎていると思います。

司会　そうですね。

遠藤　あまりにおとなが気を使いすぎる。もっと苦労させたらどうか、もう少し考えさせたらどうか、と思いますね。

司会　そういうアイディアでもって、何かやられるわけでしょ。

遠藤　ええ。例えば、長いままの竹を与えて竹馬を作らせたり、ワラを与えて縄を作らせたり。子どもたちは子どもたちなりに結構うまくやるんです。ですから、まず、子どもの自主性を伸ばしてやることが大切だと思う。

司会　なるほどね。

大村　私、母親として、そんなにうるさくないつもりでいたんですけど、子どもに「この水のんでいい？」とか聞かれるんですよね。困っちゃう。

司会　そうそう。「触っていい？」とかね。

大村　やっぱり管理していないつもりでいても、しているのかしらねえ。

遠藤　一度に直そうとするとショックが大きいですよ。事故も絶えないし。

司会　徐々に鍛えられていくんでしょうけど、やっぱり触っちゃいけないものだって結構ありますしね。そこで、もう少し社会的にみて、いま、子どもの事故に対する風あたりが強くなってきているんじゃないかと思いますが……。

遠藤　子ども会の指導者として、事故や訴訟がいつも気になってますね。私が子どもの頃は、怪我をすれば自分がおこられたし、よその家で怪我をしても、その家へ文句を言いに行くなんてことはなかった。今のお母さん方は、権利だけを主張する。「これは主催者の手落ちである」とか「施設の欠陥である」とか。ここに公園の方もおられますけど、子どもの自主性ということを考えたら、公園はあまり完璧でなくてよいと思うんです。

杉原　でも、やっぱり、現実的には事故が起きたら、使い方が悪いとか、遊び方が悪いとか言えないわけですよね、行政は。公園のつまらない理由は、なにごとも起こらないように整備した遊び場にあるわけ。造られるまでは、いろいろな要望があって、担当者も意欲を持ってやる。

でも、現実にできたものは、また同じものができたのかということになる。また、この安全さの他に、我々、公園の専門職として物を造るということしか教育されないわけですよ。そこで子どもが遊び、おとなはレクリエーションをするという、人間の方をみる眼が不足していると思う。

司会　公園というと、ブランコ、すべり台、砂場という画一的なものに、なぜなっちゃうんでしょうか。

杉原　なければ造ってくれと言われるし、あれば走るのにじゃまだと言われる。狭い所ですべてを効率よく解決しようとしているから、八方美人的で、だれにもよくないものができてしまうんです。

司会　そうすると、いろんな要望があるなかで、行政がこれだというものを出して行かなければいけないということですよね。造る側に思想が足りないんじゃないですか。

杉原　種々の要望のなかで、これだと言い切れないし、行政の立場として受けつけないわけにはいかないし。

遠藤　テストケースとして、自然の公園を造ってみてはどうですか。ジャングルみたいな。

杉原　そうですね。いまの子どもは無感動になっているんだけど、その無感動さをゆさぶるいちばんのいい手というのは、なんといったって自然だと思うんです。自然が人間に対して「生きているんだよ」って刺激を与えてくれ、感動を与えてくれる。いくらデザインを考えてもあの自然にはかなわないわけですよ。物がないときは、物さえ造ればよかったけど、そういう時代は終りつつある。確かに量的には不足しているけど、質的にも問い直されていて、「あんなものだったらいらないよ」という声もあがりつつある。

三――子どもに一日の充実感を

司会　公園というのは受け手の側の地域とどうかかわっているのか。たとえば、公園に木が植わっていて、となりの家に木の葉が落ちると、その木を切れという苦情がでるそうですが、西村さんは社会教育の仕事を担当されて、そのあたり、どうお考えですか。

西村　公園だけが遊び場なんじゃなくて、楽しさの順から言えば公園なんて最下位の方でしょ。遊び場なんていくらでもあると思うんです。都心の子は都心の子なりに、危険はあるけど、路地裏とか駐車場で遊べるんです。危険な社会の現実を知らせて、危険と共存できるよう遊んでほしいと思う。それで体験したものが生きてくるし。私なんか竹トンボを作らせたりすると、「とんでもない、指でも切ったらどうするんだ」と談じ込まれることもあるけど、切ったら切ったで、この次は切らないようにうまくやればいい。それによって、お母さんよりもっといい文化が生まれるかもしれないんです。学校や先生を憶病にしたのは誰なのか、母親の意識構造を変えないと、子どもはだめになってしまうと思う。そこで、物理的な条件整備よりも、精神的な条件整備をしているのが私の仕事だと思うんです。いまの母親は、育児のこともPTAのことも、地域社会や近所づきあいも、みんな母親の仕事になっているんですね。しかし、母親ほど子どものことを知らない人はいないと思うんです。一方、父親というと、高度経済成長政策に乗せられて、第一空間の家庭で過す時間が非常に少ない。ですから、子どものいまの生活をよく知ってもらって、親の意識構造を変えていかなければいけないんです。いまの時代、食うものも、着るものも既成のできあいのものが多く、手をかけずに楽をすることが生活の知恵みたいに思われているけど、そうじゃない、手造りの楽しさもあるんだ、という啓蒙をしていく必要がある。でも、賽の河原の石積みみたいで、こんなに一生懸命やってても、また最初から積み直す。いまの社会では、いくらやっても追いつかないんじゃないか、とさえ思える空しさを感じるときもあります。まあ、最終的には地域社会での家庭の問題だと思いますね。私なんか仕事を通して有効だと思うのは、家族単位で遊べるような場所など、遊びについての情報をうんと提供してやることですね。

司会　電話がかかってきたりするんですか。

西村　そうです。ザリガニが取れる所とか、磯に出て遊べる所とか、お父さんも一緒にゴロベースのできる広っぱとか。遊園地みたいな既成の遊び場は入れませんけどね。こんなこと、いまの区役所のやることじゃないという人もいますが、行政本来の目的かということを論ずるよりも前に、みんなが求めているとすれば提供してやらなくちゃ。

杉原　家庭がしっかりして、家庭単位の行楽をするのもいいけど、さらに、そのしっかりした家庭同士が少しづつ重なる

部分がないとかえっておとなが介在しないと遊べないようになってしまうんじゃないかしら。日曜なんか、うちの子どもは友達を捜しても意外といないんですよね。学校の砂場にひとりで行ってきたなんて聞くと、かわいそうになっちゃう。「お金」と「車」と「おとな」がいないと遊べなくなってきているんです。だから、おとなの眼と手を遠ざけた所で、子どもだけが遊ぶというのが、ますます減ってきていると思う。また、子どもにとっての一日とおとなにとっての一日は違うのではないでしょうか。子どもは一日、一日がとっても充実したものでないといけないと思うのです。めりはりのある一日一日を刻んでこそ「過去」ができるんじゃないでしょうか。

しかし、親がサラリーマン化しているから、子もその生活に強制的にあわせられちゃって、のっぺらぼうの一日の繰り返しになってしまう。私なんか家に帰ると、極端に言えば「ごはん食べなさい」「風呂に入りなさい」「宿題やったか」「寝なさい」としか言わないんじゃないか。

田井中　それにみんな「早く、早く」がつくんじゃないですか。

杉原　親として、子どもの一日のリズムある生活を、どうしたら作れるのだろうか。仕事で遊び場をやりながら、自分の子に対しては、現状のひどい所が押しつけられているのではないかと悩むときがあります。子どもの遊びを考えるとき、まずおとな自身が一日の生活をみ直さないと。日曜だけ、あるいは夏休みに、お金を使ってバッとやろうとするおとなの遊び観を考え直さないと、子どもだけに「やれ遊べ」といってもだめですよ。

四――冒険遊び場を造ってみた

司会　大村さんは「冒険遊び場」というのを主催なさっていますが、そこではどんなことをしているのですか。

大村　土地を借りて、小屋とかシンボルタワーを廃材で造ったり、タイヤの吊り橋を造ったりして遊ぶんです。遊び場には最初なにもなくて、遊具を造っていくことから、ひとつの遊びが始まるわけ。でも最初はウロウロしたり、キャッチボールをしたりして、創造的な遊びなんかやらないんです。そこでプレーリーダーというのが必要になってくるんです。

西村　そのプレーリーダーというのはどんな人たちなんですか。

大村　学生を中心としたボランティアで、ガキ大将とかおてんば娘の役目をするんです。この広場のなかにプレーリーダーが自分たちの小屋をまず造りだす。それを見てて、今度は子どもたちが自分たちの小屋を造っていくわけです。ですから遊びのキッカケを作る人ということですね。ただし、このプレーリーダーは子どもたちに「やれ」と言わない。自分たちで勝手に遊んじゃうんです。アドバイスはするけれど、指導はしません。

司会　場所はどこなんですか。

大村　世田谷区の経堂です。烏山川という川があって、これが暗渠にされて細長い土地が生まれたんです。緑道になる予定でしたが、予算の都合で空地のままだった。これを区役所からお借りしたわけです。

司会　こういう冒険遊び場というのは、大村さんが思いつかれたんですか。

大村　いいえ、一九四三年にコペンハーゲンの郊外にエンドラップ廃材遊び場というのができたんですけど、その考え方なんです。既成の遊具の整備された遊び場よりも、ガラクタが散らかっている場所で子どもたちは楽しく遊ぶということを、ある造園家が発見して、そんな遊び場を造りだしたんですね。その後、イギリスのアレン夫人がコペンハーゲンに行ったとき、エンドラップを見てすごく感動して、イギリスで冒険遊び場づくりに献身し隆盛させた。それから北ヨーロッパを中心とする各国に広まっていったんです。ひとくちに冒険遊び場といっても、いろんな形のものがあって、小屋などを建設するのが中心の建設遊び場、動物を飼育し、農作物を栽培することを遊びにしている子ども農場、といったふうに、その土地の欲求によっていろんなあらわれ方をしている。私はアレン夫人の書いた本でそのことを知って、とても興味を持ちましてね、それで昭和四十九年に、ヨーロッパの冒険遊び場をあちこち見に行ったんです。

司会　で、外国の状況はどうだったんですか。

大村　ロンドンの場合、東京と似て土地が少ないですよね。土地を確保するのに非常に工夫していた。たとえば建設予定地、いわば寝ている土地を持主と契約して借りるんです。契約が切れると、また

手前の小屋がプレーリーダーの根城

他の土地を捜すというやり方をしている。もう一つおもしろいのは、高いへいで囲いをしているところが多いということです。日本だと、外から見えないと非行がおきるのではないか心配だとなるんだけど、これは意図的に大人の目から遮断しているということなんですね。西ドイツでは「五歳以上の子どもは自分の責任のもとで遊びなさい」という看板が出ている。怪我をしたらその施設に文句を言いに行くという親の立場と、まるっきり違いますよね。それから、デンマークやスウェーデンといった人口密度の低い国でも、市バスの車庫跡とか農家の納屋を冒険遊び場として利用している。そこで子どもたちは梁の上を歩いたり、高い所から飛び降りたり、兎やモルモットを飼育して遊んでいます。

田井中　そこに集まってくる子どもの範囲はどうなんですか。

大村　場所によって異るけど、スイスあたりでは三〇〇メートル圏内を理想にしてました。その間に自動車がひんぱんに通る道があるべきではないという考え方です。その理想に近づけようと数をふやしていますね。それから年齢範囲はかなり広い。私たちの冒険遊び場では、幼児から小学六年生ぐらいまでだったけど、ヨーロッパの場合、幼児からだれがプレーリーダーか分からないぐらい大きい子どもまで遊んでいました。

田井中　異年齢集団で幅広く物を作ったり遊んだりしているということですか。

大村　そうです。日本では期間が短かったせいか、なかなか異年齢集団ができなかったですね。ヨーロッパでは、そこに何十年もあったりするので、遊び場のOBなんか来て下の子の面倒をみたりしている。

司会　大村さん達はどのくらいやったんですか。

大村　昭和五十年と五十一年の夏休みと、昭和五十二年七月から五十三年九月までの十五ケ月間でした。小屋づくりを完成すると飽きて来なくなっちゃう子がいるんです。ヨーロッパの冒険遊び場ではできた小屋を拠点にして何か始める。

自分たちの造った小屋の前に店を出す

小屋を家のようにして、庭を造ったり、動物を飼ったり。私達の遊び場の場合は、小屋の中でおやつを食べたり、昼寝をしたり、それから読書ですね。疲れやすめというんでしょうか。

田井中　その小屋で宿泊なんかやったんですか。

大村　やりました。子どもたちの方から「泊りたい」という声が出ましてね。

田井中　親のいる家から出て、親のいない家で暮らすことが、子どもの独立心をかきたてるんでしょうね。

五――冒険遊び場でおとなも学ぶ

司会　外国の場合、運営はどんな所がやってるんですか。

大村　ロンドンの場合は、地元の人たち中心で構成された委員会が運営している。冒険遊び場協会というセンターがあって、そこで土地の確保を手伝ってくれ、資金を援助し、プレーリーダーを登録し必要な冒険遊び場に派遣してくれます。しかも、プレーリーダーの選択は地元の委員会にまかされている。こんな援助の方法は日本でもぜひ取り入れたいですね。コペンハーゲンでは、市の公園課が運営するものと、民間の遊び場協会が運営するものと共存しています。

杉原　私は学生時代から外国にはそういう公園があって、そういう運営管理が本当なんだと、知識の上では知っていたけど、現実的にはなかなか手をつけてこなった。今度、私たちのところでも手作り公園というのをやろうとしているんだけど、一方的にお上の方からやろうよと言うのもおかしな話だし……。

西村　まず、地域の親や子どもたち自身からやろうよというのでなくてはだめですね。運営委員やプレーリーダーなんかも、役所から頼まれてやるというのはよくないですよ。この冒険遊び場は、発想も運営も民間サイドが主体だったから成功したと思うんです。

大村　世田谷区の公園課の人たちは、こういう遊び場のこと知っていたんですよね。実際に見てきた人もいるし。でも、いいなとは思っていてもなかなかできなかったと言うんです。こういうものを造ってくれという住民の声が大きくなればできると言うんです。これがある程度うまくいったのは、自分たちでやるんだ、責任なんかも区役所に言いに行かず私たちでとるんだ、という姿勢があったことだと思います。そういう人たちがこれからどんどん出てくればいいんだけど。

司会　一人で悩んでいる人たちがけっこういるわけですよ、行政の中にも市民の中にも。なんとなく踏み出せないでいる人たちがふれ合って、横につながってい

くことが大切ね。

杉原　冒険遊び場というと、廃材と金ずちだけと結びつけられるけど、畑を耕すとか、動物を飼うとか、民間の人と協力して積極的にやっていかないとね。でも、アイディアいっぱいあるけど、あれは緑政局、これは教育委員会とかということになりやすいですね。

大村　国際遊び場協会の前会長はスウェーデンのイエテボリ市の公園課の職員で、その頃、冒険遊び場づくりのセンターは公園課に位置づけられていた。その後、何年かして、公園課と社会教育課の両方の働きを兼ねた余暇時間部ができ、そこに位置づけられたんです。遊びと教育の問題を総合的にとらえる対処をしていますが、日本の場合はむずかしいんでしょうね。

司会　ひとつひとつの行政単位の中にいる人たちが、そこからはみ出してあちこち歩きまわるということがあればね。

杉原　それに勤務時間だけではだめなんで、私生活の時間まで使ってのめり込まないと。でも、最初はこわいんですよね。抜け出られないんじゃないかというこわさもあるし。

西村　区役所の社会教育係なんかターミナルステーションみたいなもんです。行政機構で言えば、緑政局、市民局、教育委員会なんかが全部かかわってくる。そして目的別に言えば、幼児教育あり、青少年教育あり、母親教育ありで、それを受けている人たちは夜も日曜もないんですから、へんに労働者意識を働かせたらやっていけませんよ。

田井中　杉原さん、のめり込むところわいというのはどういうこわさですか。

杉原　なにもかも忘れて、その中に没頭しなければいけないし……。

田井中　人の分野を犯すとか。

杉原　そういう面もありますよね。犯せば当然たたかれるし。

田井中　子どもにとって冒険というのは、おとなにとっても冒険だし、また、お役人にとっても冒険なんですね。

大村　そうです。冒険遊び場がなぜ「冒険」なのかというと、子どもが冒険すると同時に、おとながこういう活動をするのが冒険なんですね。冒険遊び場をやるということには、おとなの意識を変えるという意味もあるのです。遊び場づくりに参加したお母さん方も、やってみてお役人や教師の気持が分かるようになったと言うんです。ですから冒険遊び場は子どものためだけでなく、そこで大人も遊び、学んでいく場なのです。

田井中　こういう冒険遊びのできる空間がほしいですね。自分たちで作った役割分担やルールのある、最初に言った基地遊びみたいなのができる森がほしいですね。たとえば、市民の森の中に、そういう一画を設けてくれたらいいんだけど。

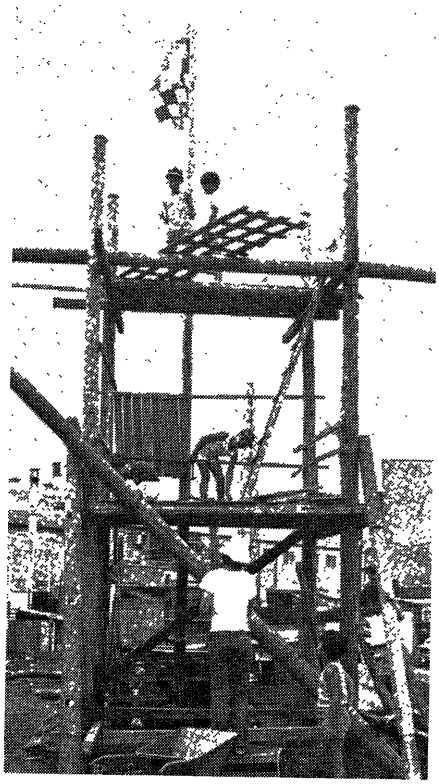
杉原　学校とセットしたような格好で、畑を耕したり、収穫したり、先生のおっしゃられたようなものは、プランとして考えられるわけですよね。でも、いまのお役所の公園なんて距離がありすぎて……。土に親しむこと、畑を耕したりすることは、人間を耕すということで効果があると思うんですけど。

六――学習は学校、遊びは地域で

司会　地域の中で異年齢集団を作って遊ぶということがなくなってきているわけだけど、学校は子どもの遊びにどこまでかかわれるのでしょうか。

田井中　子どもたちの大半は学校生活は楽しくないと言っているんですよ。そして先生に何でも打ちあけられるかというと、先生も頼りにならないと言う。充実感のない、砂をかむような思いで暮らしているんですね。「人間性豊かなカリキュラム」とか「ゆとりのある充実した教育」とかいいながら、どこの学校でも、いまだ充分に展開できていません。ひとつには、遊びというものに学校がどうかかわっていくのかということを、私たち教師がよく分かっていないんですね。文部省の指導要領の改訂に伴って「新しいカリキュラムを作ろう」という運動をやっているわけですが、「学習時間を少なくして、自由裁量の時間を多くし、それによってゆとりのある活動をしよう」というのが、はたして遊びにつながるのだろうか。学校は勉強だけ教えていたらい

子どもたちは高い所が好きだ



いんだ、遊ぶことはこっちでやるからという人が現われたらいいんですけど。現状では、早く家に帰ったら「早く塾へ行け」ということになりかねない。「できれば夕方まであずかってほしい」なんて言われて、小学校がまるで学童保育所みたいにされるわけ。学校が全部フォローするのか、学校はそれを地域に押し返すべきなのか、低学年を受け持つ教師たちは、そのことで痛切に悩んでいますね。

司会　大村さん、お母さんの立場で、子どもを帰されてどうですか。

大村　子どもの居場所が現実にないんですね。うちの子も五時まで学校にいて帰ってくるんですけど、本当はそうじゃない方がいい。今はそういう場がないから、ありがたく乗っかっているんですね。本来、学習と遊びは不分離のものだけど、学校では学習の面で頑張ってもらい、遊びは校外で、学習を裏づけるような型でなされるのが理想だと思う。遊びをカリキュラム化するのはよくないと思いますね。いま学校におんぶしすぎている部分を、親は取りもどしていかなくては。

司会　遠藤さん、地域の受け手の側として、どうですか。

遠藤　遊びをカリキュラム化するのは理想ではないけど現状ではやむを得ないんじゃないですか。学校本来の姿は学校教育で、遊びの教育ではない。遊びは生活の中からにじみ出てくるものなんで、与えられた遊びなんて、子どもにとってはおもしろくないですよ。ですから、学校で遊ぶのは現状ではやむを得ないけど、本来の姿ではないことを、親は常に心しておかないといけないですね。

西村　学校教育で得た知識を、生活の中で実際に体験して身につけていくのが本当でしょうね。それによって遊びの中に知識も生かされてくるし、遊びも進歩していくと思う。学校教育に遊びを取り入れている学校が多いけど、田井中先生の学校ではうまくやっているんじゃないですか。

田井中　タテ割り集団を作ってみたんですけど、壁につきあたってだめだった、という結論が出そうです。私のところは例の横浜プランの研究実践校で、全国から多勢の人が視察に来られました。学校でどう遊ばせているのか、一年から六年の学級編成のなかでタテ割り集団がどうできるのか、地域社会の中で自然発生的にできる異年齢集団が学校の中ではたしてできるのか、ウの目、タカの目で見にこられたんですが、学校が本来持っている性格からして、非常に無理をしていたんですね。それは子どもの遊びの本能をゆり動かすものではなかったわけです。それから今の若い先生たちのほとんどは、遊びをあまり知らないんですよ。二十代の先生たちは勉強にこれつとめて、確かに優秀だが、けんかもしたことがないし、兄弟も少ないし、無菌培養されてきたようなものです。そういう人たちが遊びを教えるといったって、竹馬をやったこともないし、作ったこともないから、遊びの指導なんかなかなかできないんですよ。それでも地域の人たちは、子どものことなら何でも学校で面倒みてくれると思っているから、その期待に応えようとけなげに頑張ったけど、あまり展望はよくないですね。

七――地域にアミの目を

遠藤　先生、道草という言葉がありますね。学校では道草なんか食ってないで早く帰れと指導していると思うんですが、先生の所ではどうですか。

田井中　いまのこの横浜市のなかで、道草を食えるような通学路を持った学校はいくつありますかね。途中に小川が流れていて、ドジョ子だのフナッ子だのが泳いでいたりするような、そんな所があれば道草を食わせたいですよ。

遠藤　私たちのPTAでは学校開放運営委員会というのをやっているんです。学校開放というと施設を使ったものに限られているけど、それを思い切って地域に広げてみたのが、最近やった町内の史跡めぐりハイキングなんです。これはおとなが企画したんですけど、子どもがそこまで自主的になれないのなら、キッカケを作ることがおとなの役目だと考えてますがね。

杉原　私はこの町内史跡めぐりハイキングを違った意味でいいなと思う。都市のなかに公園を造っていって都市をよくしようとしているんだけど、所詮「点」なんですよね。点をいくら造っても、この横浜市を制覇できないわけ。やっぱり、もともと私たちの日常生活は、この地域にあったはずだし、それを掘りおこし、日々の生活や日常の地域のものを大事にして、アミの目をはらないといけないと思う。そうすれば、異質な団地開発みたいなものが地域におきたとき、地域の人たちがみんなで「それはよくないよ」と言う雰囲気が出てくるし、遊び空間というものを公園だけにとらわれないで、もっともっと広い範囲で子どもに与えられるんじゃないか。公園施設だけじゃなくて、もともとそこにあった文化財とか、そういうのをつないで全部を生活空間に取りもどしていったらどうだろう。そういう意味で遠藤さんのところの史跡めぐりハイキングをいいなと思ったんです。

司会　点と線から面へ、みんなが努力しなくちゃいけないわね。

杉原　お金を使って遠くへ行くのだけが遊びだったり、生活の回復じゃない。毎日、毎日の生活の中であったはずのものを、我々は自然に忘れさせられているんじゃないかと、もう一度み直したいですね。

八――何ができるのか

司会　それでは最後に、自分は何ができるのか、おひとりづつお伺いしたい。

田井中　遊びに関して学校教育はどうかかわれるのか、というのが私自身の課題なんですけど、今日、みなさんの意見を聞いて、カリキュラムのなかに遊びを取り入れるのは否定的でしたので、遊びと学習、カリキュラム・メーキングではっきりした線が出たと思います。いまのサラリーマン化した子どもたちに対して、学校も罪深いことをしていると思う。教師は母親に負けないぐらい「早く、早く」と言っています。学校生活そのものが、働きバチを作るようなもので、批判の多い日本人の生活態度のもとを作っているんじゃないかと思います。今日は、学校教育を遊びの面から考え直すのに良い示唆を得られました。何ができるかというと、そういう考えでカリキュラムを組んでいけるということです。

大村　私は遊び場づくりなどの体験をとおして分かったことを人に知らせていきたい。また、ひとりでとまどっている人をはげまし、アドバイスしていきたい。子どものためのいろんな実践が、日本のあちこちにあるんですよね。お互いに知り合い、教え合いたい。そのような意見や情報の交換を国際的にもしていきたいと思います。先進国では文明が進んだ結果、子どもをとりまく環境にいろんな弊害が早くから出てきているわけで、そういう国では早くから冒険遊び場に取り組んでいる。私はそれを学んで、関心を寄せるいろんな人たちに知らせ、また、日本の状況や実践を世界の人に紹介する役目を果したい。

西村　私は自分の仕事をとおして、直接、子どもたちにすることと、間接的に子どもたちにすることがある。直接することは、子供たちの文化としての遊びを造り出していくことのサポートをする。行政が直接、企画して主催できるものをやっていきたい。間接的に子供たちにすることは、親を啓蒙していくというような条件整備を進めていくことです。それからオピニオン・リーダーやボランティアの発掘ですね。大ぎょうに言えば、地域社会の持つ教育機能を回復するために努力していきたい。

遠藤　行政には行政の立場があり、私たちには私たちの立場がある。そして、いまの社会構造というのも、政治の流れというのも、既成事実としてある。それらが子供の遊びを考えるうえで、弊害だと分かっていても、いますぐ打ちこわすことは不可能だと思うんです。既成事実を生かしながら、しかも理想にもえて、少しづつ改善していかなくちゃいけないんじゃないかな。学校とか行政の方々と違って、スポーツ村（戸塚区大正地区は昭和五十一年にスポーツのモデル地区として指定された）や学校開放、また子ども会みたいなボランティア的組織では、自由に何でもできると思うんです。ですから、そのいい面を生かして、ユニークに対処していきたい。何ができるかというと、母親が自分の権利ばかり主張しないように、あらゆる機会、場所を通じて話し合っていくということです。心と心の融れ合いのある場を作って、母親たちと共に学んでいきたい。

杉原　何ができるかと言われると、私ひとりで緑政局をしょって立つみたいで、何も言えなくなっちゃうんだけど、大きな問題が二つあると思います。ひとつは、我々が図面を作って、コンクリートの物を造るということだけにこだわらず、さっきの話にあったようなプレーリーダーとか、人のつながりをとらえた、どっちかというと社会教育みたいな、もっと広い視野を導入していくべきだと思います。もうひとつは、いま市内にあるなんでもない林や小川や山を残していくこと。あれはみんないつまでもあると思っているんだけど、所有者もいるし、生産活動にも使われるだろうし、意図的に確保していかないとなくなってしまう。ところが、テニスコートを造ってくれというような、用途のはっきりしたものは声があがるんです。しかし、あたりまえの雑木林なんか大事だという声がなかなかあがらない。子どもからおとなまで「生きてるよ」という共感が得られるのは、やっぱり本ものの自然に接したときだと思う。それを皆の共通の財産として残していきたい。子ども時代のなんとなく肌にしみてた自然、大きな夕陽や大きな木が人間を支えているような気がするんです。

司会　時間もきたようですので、今日はこの辺で。どうも長時間ありがとうございました。